

## 真言宗における教化活動の理念と展開

小山 典 勇

はじめに

つくしあい運動が挫折した背景や理由については種々に検討され、また本誌においても問題の所在が指摘されている。それらの一つ一つの指摘には十分な理由があるが、筆者は「教化とは何か、何故教化活動をするのか」という基本的な問いかけと考え方が共通理解されず、しかも不十分であったと推測し、そのことが挫折の最大の原因であると指摘し、私見を述べてきた。

「教化とは何か」という基本的な問いかけが不十分であったということは、つくしあい運動の挫折という局所的な問題ではなく、我々が住職になるまでの子弟教育に根本的な欠陥があることを示唆していると考えられる。つまり出家授戒から四度加行・入壇灌頂に至るまでの教育目標・教育方針に教化という意識が欠けているのではないだろうか。「教化とは檀信徒のために何かをすべはい」というような意味ではない。」

我々は改めて問い直さなければならない。

何のために僧侶になるのか「目的」、どのような僧侶・住職になるのか「目標」、そのためにどのような学習・修行をすればいいのか「学習・修行」、学習・修行で培われた内実をどのような方法や手段で伝達・実践し「実技・技能論、実践論」、どのように賛同者を募り、どのような活動や運動を展開していけばいいのか「活動・運動論、方法、組織論」、あるいは現状をどのように把握していくか「調査、情報収集」、などがみえているのだろうか。このような手続きを経て子弟教育・後継者育成の全体像が明らかになっているのだろうか。

しかし、厳しい現実が目の前にあるのも事実だ。次世代を担う教育のあり方に問題があることが分かっている。取り組みは鈍い。その背景には、わが子を跡継ぎにさせたいという親のエゴがはびこり、あるいは葬儀・法事さえできればいいという僧侶の職分に対する意識の低さもあるにちがいない。それを許してしまう檀信徒の甘さ、いいかえれば住職に対する無期待感があることも否定できない。思いつくまでも、実に複雑な複合的な末期的な現状である。総合調査の分析研究から智山派の現状の問題が浮かんで来ているが、例えば、教化活動の数量でいえば、経済的な基盤が強い寺院は、そうでない寺院よりも数多くの活動をしていることが分かる。しかし、詳細に検討すれば、経済的な基盤が強い寺院であっても活動が少ない寺院も多々あるのである。つまり教化活動を左右するものは経済的問題も大きい、それ以上に住職の意識によることを示している。まさに「法は人によって弘まる」の証左である。意識の啓発を図る子弟教育・住職研修が重視される理由である。

伝統教団の現状では、寺院は世襲化を避けることはできないにしても、住職個々の宗教性と問題意識を重視し、宗教理念に基づいた積極的な教化活動が実践されなければ、寺院は住職一族の私有化へ、さらには私物化へと進んでいき、住職の即物的な欲求を追求するだけの場となるだろう。

宗団の存続の基盤は子弟教育・住職研修にあると認識すれば、それは「法流を継承する」体系であるから、その法

流の内容つまり教育・研修の内容およびあり方が常に問われなければならない課題である。

筆者は、大乘仏教の諸経典は、悟りの境地を自分自身に求め人間のあり方を探りながら、その時代その地域で展開された諸活動の集大成であると考えている。経典つまり過去の先覚者たちの実践と目指したところを考察すれば、その作業は、我々の現状を批判し未来を展望する示唆となるにちがいない。この小論では、真言宗の所依の経典である『大日経』を資料に、教化伝道のポイントに関する文脈・考え方を拾い上げて検討してみよう。

なお筆者は平成四年度後半から大正大学における智山伝道学を担当することになり、学生諸君に直接的に教化伝道をテーマに講義・対話をするようになった。この小論はその講義メモの一部でもある。

#### 一 仏教をどのように学ぶか

とにもかくにも仏教が我々の原点であり目標である。しかし自分の意志で、自らの意欲に基づいたものでなければ、仮の原点でしかないし、また目指すものも本物とはいえないだろう。つまり食事を例にすれば自分の食べたいものを注文する場合との違いに相当する。寺院の世襲化が避けられず、しかも世襲化が進んでいる現状では、条件としては食事は用意されている状況に等しい。大学入学の動機が自分の意志となっていないければ、あるいは学ぶことが必要なものと意識されていないければ、仏教を学ぶ実感も修行の意味も乏しいものとなるだろう。そこで学生諸君にアンケートを試みたことがある。①自分の将来像は何か、②そこへ至るプロセスをどのように考えているか、③そのために今なすべき課題は何か、以上の三項についてである。回答は多様である。

ちなみに①将来像について紹介すれば、例えば、◇何を聞かれても応えられる知識のある任職、◇檀家の人々の心がやすまる寺院、◇親しまれる任職、◇お金のことなどで陰口をいわれない任職、◇坊主丸儲けといわれない僧侶、

◇社会的に批判されるような寺院のあり方を糺したい。◇今のままの仏教は限界があるから真言宗の本来の山岳仏教を定着させたい。そのための密教行者。◇現代的な密教寺院を目指したい。◇葬式だけの寺院ではありたくない。◇祈願寺だから護摩をやりたい。◇（現任職が巡礼・ご詠歌をしているから）継続していきたい。◇父がお金のことです苦勞しているので、檀家を増やせばいいと思うが、それだけでは解決しないように思う。◇真言宗の教えを理解した本物の真言宗の行者になりたい。◇海外に布教活動を広げ別院をもちたい。◇お年寄りには講談・落語、こどもには紙芝居などで楽しい寺院にするために話芸の研究をしたい、などと具体的に多彩である。

寺院・住職に対する批判や自分の将来が決まっていることへの不満・不安も見られる。現代に限らず僧侶や寺院には世間から批判される面が多々あったことは否めないが、以上の声は本宗の学生諸君の声であるから、住職としては自分の息子・後継者たちの眼に写った親つまり自分の姿であることを見落としてはならないだろう。

また、寺院住職になったら、何かをしなければならぬ・教化活動をとるという責任感を是としても、活動内容が小さく限られたものとなっており、大勢は現状維持、肯定的な意見に終わっていることは問題だろう。

学生諸君の意識や関心を推測し、それらを話題にしなから、それぞれの目的を実現していくためには、仏教をどのように学ぶか・寺院とは何かを考察していくことになる。

そこで、仏教とは何か、基本的な考え方から検討しよう。仏教という言葉を区分けして、次のように解釈されている。

①仏つまり釈尊の教え

②仏となるための教え

つまり仏教とは、第一に釈尊の教えを学ぶという一面と、第二に自分自身が仏になる過程を積み重ねていくという

一面とがある。この二つの解釈から我々の現状と将来像を検討することができる。

寺院とは何か、といえは我々住職が活動する拠点である。寺院の基本は帰依三宝である。したがって三宝に帰依するという帰依の姿勢もまた我々の基本的な立場となる。帰依とは、釈尊の教えを学ぶ、聞く、実践するという姿勢である。その姿勢は、出会う人々を仏・釈尊として尊敬し、いろいろな意見や考えを仏法として仰ぎ、出会う人々と出会いを通じて同信同行の友としてお互いに切磋琢磨していく、これが仏・法・僧の三宝帰依の具体化である。

帰依する姿勢は、前記の①に該当し、相手を受け入れていく心情的な営みである。

帰依の姿勢は、相手を受け入れるだけでなく、批判精神が伴うと考えられる。つまり仏に帰依するという場合、漠然とした他人任せの心情であるはずはない。自分が未熟であるという自己認識や、このままではいけないという危機意識、さらに自分を向上させたいと願う意欲が働いているはずである。このような心理は批判精神であるといえるだろう。くりかえすことになるが、自分の現状を検討し、社会の諸状況を観察して、問題は何か、どこに問題があるのか、何故問題となるのか、を検討していく知的な営みである。これは前記の②に該当するだろう。

仏教とは、釈尊の教えであるということはいうまでもないが、同時に我々が修行・実践を通じて仏を目指していく歩みでもある。その歩みつまり姿勢は、本尊・他者を受け入れる帰依と批判精神との二本柱である。

それでは次に所依の経典から考察しよう。

二 大日経は我々に何を教えている

真言宗の所依の経典である『大日経』は我々に何を教えているのだろうか。

我々が知りたいことは、我々は何を根拠に教化伝道を実践していくのか、このことを『大日経』に求めることがで

きるだろうか、である。あるいは教化伝道にどのように関わるのか、さらには、悟り・智慧とは何か、智慧を身につけるにはどうするか、それは自分一人の問題なのか、対人・対社会に関わるものなのか、などである。

『大日経』の三句の法門は、この問題に対する回答となるだろう。三句の法門とは「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす」という文脈であり古来より重視されてきた。該当部分を概略してみれば次のようである。

### 三句の法門

「世尊よ、如来はどのようなにして一切智智を得たのですか。彼は一切智智を得ると、無量の衆生のためにどのようにに説法したのですか。それぞれの立場や境界に応じて、あるいは性質や願望に応じて、さまざまな方法や手段を通じて、一切智智について解説したものと思いますが、つまり例えば声聞の立場で、縁覚の立場で、大乘の立場で、五神通の立場で、天に生まれたいと願う立場で、人・龍・夜叉などに生まれたいと願う立場で、もし仏に出会って悟るものには仏の姿を示して……いずれも彼らの言葉に合わせて、身なりを同じくして、解説したと思いますが。

(私が考えるには)この一切智智の境地はどんな立場も包含し共通する同一の味です。いわゆる如来の解脱の味・境地です。世尊よ、それは虚空界が一切の分別を離れて、分別も無く無分別も無いように、一切智智は分別を離れて、分別も無く無分別も無い。大地「地界」が一切衆生のより所であるように、一切智智は天・人・阿修羅のより所です。火界が一切の薪を焼くように、一切智智は煩惱の薪を焼きます。風界が一切の塵を除くように、一切智智は煩惱の塵を除去します。水界は一切衆生が歓楽するものであるように、一切智智は天人が利楽するものです。世尊よ、このような智慧は何を原因とし、何を根本とし、何を最上とするのですか」

仏はいう。

「菩提心を原因とし、悲を根本とし、方便を最上とする。秘密主よ、菩提とは何かというなら、それは如実知の自心である。すなわちこのアノクタラサンミヤクサンボダイはわずかでも得ることはない。何故なら虚空の相であるから」

一切智智に関する質疑「Q—A」の要点は次のとおりである。

Q 1) 如来はどのようにして一切智を得たのか、

Q 2) 一切智智を得て、その後、どのように衆生に説法したのか、

A) 衆生はそれぞれに立場・環境「趣」が異なり、性質・願望「性欲」に違いがあるから、それぞれに適切な手段が必要である。すなわち声聞乗道、縁覚乗道、大乘道、五通智道である。

Q 3) 種々の方便道と解脱の味とに矛盾はないか、

Q 4) 一切智智とは、何が原因であり、何が根本であり、何が最上であるのか、

A) 菩提心を……

説明

Q 1)と2)は、自分の問題を解決する方法つまり仏となる道を極めること、次いで自分の内面への問いかけが対人へと転換することである。それは悟りの境地・智慧の問題である。智慧ここでは一切智智は分別を越えた境地であり、すべてのより所である。智慧は煩惱を焼き除く働きがあるから自分にも他人へも働く。すべてが希求するものである。他人つまり衆生は条件や資質が違うからその対応には適宜適切な手段が必要である。条件や資質という特殊性に

応えられるのは、一切智智という普遍性である。手段・方法という実践を通じて智慧が開発されていくとも考えられる。一切智智は、菩提心・大悲・方便に分析されるのであるから、次に、菩提心、大悲、方便について、辞書的にまとめておこう。

◇菩提心とは

①人間存在の根拠。

人間とは何か、どのような存在かと問えば、菩提心つまり知的・精神的な存在であると規定することができる。釈尊の仏教では、心の諸相の観察の結果、執着・我執・我欲から離れることに重点がある。人間とは本質的に清らかな存在「自性清浄心」である。このように心はそのまま存在を意味すると理解される。同意語として仏性、如来蔵、阿頼耶識などと用語は変化するが、基本的には人間存在は清らかなものとする点に変わりはない。

②心の働き。

悟りを求める心、自分を向上させていく意欲・意志。

したがって人間とは何かと問われれば、①精神的な存在であり、かつ②悟りを求める心をもつものという二義を含んでいるといえる。菩提とは悟りであるから、悟りには、智慧と慈悲との二つの面がある。智慧は煩惱を摧破して苦から解放に導く知的な働き「||金剛杵」、慈悲は苦から解放されるようにと働きかける心情「||蓮華」と説明される。

胎蔵曼荼羅における中台八葉院は、このような心の機能が全開された状況が八葉の全開の蓮華で示されている。我々修行の未熟なものは、蓮華の種であり、未開敷のつぼみの状態である。常楽会で読誦される「遺教経」では、「少



欲知足」が力説されているが、それはこの世の生への執着を最小限にする努力にはかならないし、それは自らを灯明とせよ、法を灯明とせよという考えに裏打ちされている。

#### ◇大悲とは

①如来の広大無辺な救済の働き・働きかけは特に大悲といわれる。真言宗ではその働き方は加持といわれる。

②慈・悲とは抜苦・与楽である。周匝の人々の苦難に同情し「慈」、苦難・逆境から抜け出せるように働きかける心情「悲」。

釈尊の仏教では、「遺教経」に示されるように、人里離れたところを拠点に孤高性を重視して、執着を離れる修行につとめた。しかし、大乘の菩薩は世間に位置し、大衆の中にあつて積極的に他者に関与し、他者の苦悩の解決を自己実現の目標とした。真言密教では、菩薩が実践へ向かう意欲を普遍化し、それは誰もが内在するものとし、心の奥底に宿る不思議な能力「菩提心」と規定している。菩提心の一面を智慧とすれば、他の一面は慈悲であるから、ここでは他に強制されるものではなく、内部から湧き上がる自発的な心情が重視される。しかも菩提の相は、固定的なものでなく、千変万化するものであるから、常に働きかけようとしているのである。この力の自由自在な能力を開発するための方法・手段として、密教では儀礼（意味不明の言葉・手つき・身振り、精神集中方法）を重視する。言語では表すことができない無相の境地を、具体的な形に仮り表現し、その境地を経験する。灌頂儀礼はその典型である。真言宗における法要はその神秘的な世界・境地を模擬化し、体験する場である。大悲は、必然的に形に表すことにながらることに注意しておきたい。これが教化活動の基調であるといわなくて何であらうか。

◇方便とは

①具体的に手立てを講じて、行動を展開すること。この手立て・行動によって当面の問題を乗り越えることになるが、それは本尊との関わりともいえるし、本尊に近づいていく筋道・実行でもある。

②具体的な手立てとは、身・口・意の三方面にわたる。それを儀礼として形式的に表現し経験する場面、その経験を踏まえて日常生活の中で自在に実現していく二点が要請される。

③儀礼は、狭義的には、伝統的な法要・行事である。しかし儀礼の範囲を寺院内における行事としてとらえると、方便の全体像を見失う恐れがある。意識のうえで日常生活も本尊の境地が現れている儀礼の世界なのである。つまり我々の日常生活における意識を高め、本尊に近づいていくところに方便の真実義があると考える。あるいは逆に考えれば、本尊の働きかけが常に我々の目の前にあるということである。

④これを教化活動の場面に移せば、檀信徒が行事に直接的に関わり、体験する点を重視すべきである。これは黙って意味も分からずに座っていればよいというものではない。要略すれば、言葉による法話など、文字による揭示伝道・文書伝道、さらに視聴覚器材による教化活動、体験を重視する勤行・ご詠歌・写経・遍路などなどの具体的な関与の方法・実践が必要であるということはいままでもない。ここで儀礼という場合、秘儀・諸作法は一面では「いわゆる怪しげな密教」「超能力」などと誤解される心配もあるし、また伝統行事などは習俗を伴うものであるからその意味するところを見極めることが重要であるし、また伝統行事はマンネリ化しやすい、などの落とし穴が多々あることに注意すべきである。したがって常に原点に立ち、菩提心の開発につながるかどうかを判断基準とすべきだろう。

三 教化活動とは、三句の法門から

菩提心とは我々の内なる可能性「菩提心を因とし」をいい、それは、人間存在は悟りの可能性をもつ存在であり、しかも、悟りを目指していく精神的な存在という二重の意味をもつ。

つまり、悟りは智慧と慈悲であるから、自分の苦悩の解決が、そのままに他者の苦悩の解決に働きかけようとする心情が働く「大悲を根とし」。その働きかけを具体的な行動となって現していく「方便を究竟とす」。

三句の法門は、このように自分を作っていく営みを分析したものとということができるだろう。このように解釈すれば真言宗の修行者が修行することは、具体的には教化活動を実践していくことに置き換えられる。自己実現の歩みは、教化活動であるという点を三句の法門は示しているといえるだろう。さらに視野を広げれば、教化活動は住職一人の内面の問題だけでなく「自利」、出会う人々相互に関係する・関連しあうものであり、結果として他の人格を高めていく「利他」ことにつながる。この関係における心・人格の変質・変容がいわゆる「心品転昇」であり、その一々を観察することが「如実知自心」であると考えられる。

次のようにまとめてみよう。

我々は悟り「即身成仏」を目指して修行する。その修行とは教化活動の実践である。何故なら、悟りとは自己の内なるほとけの開発つまり菩提心の開発にはかならないからである。この意味で悟りとは自己啓発であり、自己実現の領域にある。

菩提心の開発は対人関係を通じて、生きることの苦しみ・悲しみ・喜び・楽しみなどを経験しながら行われる。住職・教師には教化活動という言葉で解釈されるのであるが、お互いの人間的な成長・心理的な深まりは、悟りへ向かう歩みと考えられる。さらにその営みは住職・教師だけが味わうものではなく、対人関係にある檀信徒・出会う人々すべてに開かれている共通の道でもある。それを「同行二人」ということもできるだろう。

『大日経』に「如実知自心」というが、この「如実」とは教化活動を実践している行者の現状である。『大日経』には、旋火輪、幻などの例えについて説かれるが、それは次ぎのように理解されるべきだろう。教化活動をしていると、対人関係においては、自分がしてやったという優越感、借りがあるという引け目な気持ち、いろいろな先入観や思い込みが伴うものである。その心理状況は、それ以前の適切な人間関係を破壊していくものである。つまり妄想である。幻などは、その妄想を離れる修行として、本来の自己に軌道修正するために設定されていると理解すべきだろう。それを突き抜けた先に「大空位に遊ぶ」という大きな広いところが開けてくる。ちなみにウン字とは、因縁「しがらみ」を遠離し、自分勝手な思い込みや捕らわれをご破算にし、自由自在な境地であると解釈される。

次に教化活動という展開に目を移してみよう。

教化活動は、以上の二つの側面から得たものを発表し・伝えるつまり情報を提供することにはかならない。そこで、発表し・伝える方法が検討されなければならない。

しかしながら我々はこれまでに経験的に、自分の気持・考えを①ことばで表明して伝える、②文字文書で表現して伝えることを知っている。釈尊と弟子の関係を例にすれば、釈尊は説法し、弟子は生の声つまり教えを直接聞いた。そこから弟子は声聞と呼ばれていることを知ればよい。

それでは釈尊の説法に漏れた後代の修行者たちはどうしたのだろうか。

仏塔を場として自分にとっての釈尊解釈がさまざまに行われた。その一つに観仏（見仏）三昧とよばれる修行が行われている。つまり三昧の境地に入り、心眼で仏が自分の目の前に立っていることを確信し、仏の説法を聞いたのである。經典には、瞬きもなく仏を見つめるという表現が繰り返し返されているし、また行法における見仏は曾ての事情を推測させるものである。ポイントはここにある。

つまり釈尊から隔たり、説法を聞くことができないものには、悟りの境地は言語道断の世界でしかなかった。しかし、真言密教に至って、その境地は、いわゆる真言・印・三摩地の三方面から経験することが明かにされた。つまり方法論の第三として③儀礼が道場する。「大日経」は、不可思議な境地を可視的に曼荼羅図絵に表し、また不可思議な境地を人格化し言葉やしぐさによって体験し束縛から解放させること、など各方面から儀礼の仕組みを説き明かした経典といえるだろう。この時点において、現実と不可思議な境地とが逆転し、我々は現実の中に不可思議な境地を経験していることになる。ここに事相の意味があると考えている。

日常生活では、儀礼は、仏壇を聖なる空間とし、本尊・先祖との関わりにおいて自己開発していく場であると考えられている。それは儀礼の一部であり、繰り返すが、上述のように、仏前で養った心を対人関係においてさらに充実・充足していくことが必須であり、それが修行でもある。勤行・法要という形式を有相の三密、形式を離れたところが無相の三密といわれることは周知のとおりである。

このこと「無相の三密」は、個人的には生涯にわたる自己開発の道であり、また人間関係では家族という一番身近な関係からお互いを高めあっていく営みである。この意味で家族の意味と役割は大きい。このような人間関係から築かれた信頼・信仰心が、家庭を起点として地域社会へ展開していくことは必然的な流れである。

教化活動はそのような意欲を支える役割を果たす。住職・教師は、教化活動を通じて理論を实践で確かめ、実践を通じて理論を再構築しつつ、自分の教学を形成していくことになる。そのあり方は、十住心思想でいえば、現在が、第一住心であれ、第二住心であれ、第三住心であれ、そこから円満至極な第十住心を目指すだけである。

追記

なお、菩提心の開発がキーポイントであるから、積尊、空海、覚鑊の出家の事情・動機、あるいは社会的背景なども言及せざるをえない。積尊の場合は『スッタニパータ』より悪魔ナムチとの対話、生産労働に対するバラモンとの対話、空海の場合は『三教指帰』、覚鑊の場合は『述懐詞』が資料となる。